

アレクセイ・カラマーゾフの運命

亀山 郁夫



「カラマーゾフの兄弟」は、未完の小説である。

小説をお読みになった読者も、今日ここでお芝居をご覧になった観客の皆さんも、フィナーレに満ちわたる美しいシユプレヒコールに、きつとベートーヴェンの「歓喜の歌」にも似た喜ばしい高揚感を経験されたのではないかと思う。私自身、この場面を訳しながら、こみ上げる涙を抑えることができなかった。しかし、これほどの高揚感に満ちた小説が、なぜ、「未完」なのか。おそらく皆さんは、続編などなくてもよい、せつかくの感動に水をさすな、とおっしゃりたいにちがいない。むろん、私も同じ気持ちである。しかし、実のところ、この小説、いや、この芝居には、続編を想定せずには理解できないモチーフがいくつかが提示されている。その最終たる場面が、アレクセイ・カラマーゾフの銃殺を暗示する衝撃的な幕開けということになる。

ドストエフスキーは、序文で、アレクセイ・カラマーゾフ

フの伝記は、二つの小説からなり、「第一の小説は、すでに十三年前に起こった出来事……、主人公の青春のひとコマを描いたものにすぎない」と書いた。これほどのボリユーム感あふれる小説を、「ひとコマ」と断じるほどだから、作家はおそらく、「第一の小説」を質量ともに圧倒する「第二の小説」の壮大な物語世界を用意できると踏んでいたにちがいない。ところが現実には、作家は、そのための素材をほとんど残さず、小説の完成からまもなく他界してしまった。その約一カ月後に、時の皇帝アレクサンドル二世の暗殺事件は起きた。一八八一年三月のことである。

小説の翻訳を終えた私は、作家の無念を晴らしたいとの思いから、「第二の小説」に残されたいくつかの痕跡を手がかりに、「第二の小説」を復元することを

思いたった(参照「カラマーゾフの兄弟」の続編を空想する)。思えば、絶滅した恐竜の骨格を復元しようとする考古学者の執念に似ていた。そして「第二の小説」では、「父親殺し」を主題とした「第一の小説」と同心円をなす「皇帝殺し」が新たな主題となり、最後は「皇帝万歳!」のシユプレヒコールで締めくくられるはずだ、と結論するにいたった。

「皇帝殺し」の犯人として名指しされるのは、むしろ、「第一の小説」から十三年後の今、三十三歳になったアレクセイ・カラマーゾフ。ロシアの研究者もほぼ同じ見解に立っているが、そうした彼らが最大の論拠とするのが、小説の冒頭に引用された聖書の一文である。

「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。」

美しい言葉である。これはいうまでもなく、イエスが、十字架上で自らの死を予言した言葉だが、同時にこの二行は、主人公アレクセイの不吉な運命の暗示する言葉でもある。「皇帝殺し」という重い十字架を背負う新しいキリスト——。続編を空想する作業の

なかで、私は、徐々にある思いに傾きはじめた。当時、頻発しつつあった皇帝暗殺未遂事件を考えると、作家は、当初念頭にあったプラン通りに「第二の小説」は書くことは困難だったのではないかとの思いである。なぜなら、歴史は、すでに小説を追い越そうとしており、かりに作家が無事生きながらえて、「第二の小説」に着手できたにしても、現実に起きた皇帝暗殺事件以後、彼のうちに、もういちど歴史を追いぬこうという気力が残されていたとはとても思えないからだ。

その点を考慮すると、今回の「カラマーゾフの兄弟」上演で使用される八木柀郎氏の台本は、驚くべき予言に満ちていることがわかる。どこが驚くべきなのか。それは、アレクサンドル二世暗殺事件の影の主犯としてアレクセイを想定している点、つまりどこまでも歴史的事実を踏まえてこの台本が構築された点である。小説の完成から三三〇年の時を隔てて初めて可能となった歴史ファンタジー、私は改めてこの台本もつ意味の深さを新たな視点から問い直さなくてはならないと感じている。

(東京外国語大学長)